

マルクス主義の創始と発展（二・完）

井 上 周 八

- 一 はじめに
- 二 マルクス主義の思想・世界観・哲学について
- 三 高等学校卒業ごろまでのマルクスの思想
- 四 大学入学より学位論文提出ごろまでのマルクスの思想（以上三七卷二号所載）
- 五 マルクスの学位論文について

五 マルクスの学位論文について

マルクスはその学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異」(Über die Differenz zwischen der demokratischen und epikureischen Naturphilosophie 一八四〇年から四一年三月にかけて執筆)を、後にマルクスの義父となった「わが親愛な父のごとき友、トリアー市在住の枢密政府顧問、ルートヴィヒ・フォン・ヴェストファーレン氏に」、「子のごとき愛情のしるし」として献げている。

学位論文は、第一部でデモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との一般的差異を論じ、第二部で両哲学の個別的差異を論じている。そして第二部は、第一章「アトムの直線からの偏差」、第二章「アトムの諸性質」、第三章

「原理としてのアトムと原素としてのアトム」、第四章「時間」、第五章「気象」からなっている。第一部と第二部の前後に「序言」と「補遺」がつけられている。

マルクスは彼の義父になる人から、本誌三七卷二号でもふれたように、その少年期から青年期にかけて、ヒューマンステイックなイデアリスムスを学んだのであるが、マルクスは献辞で次のように述べている。

「当代のあらゆる進歩を熱情と真理の熟慮とをもって迎えいれる、かくしゃくたる老翁、あの深い確信にみちた、明るく輝くイデアリスムスによって——イデアリスムスだけが真の言葉を知り、世界のすべての精神の前に現われてくるのですが——、退嬰的な幽霊どもの投影の前でも、当代のしばしば暗黒な曇天のまえでも、ついで逡巡したことがなく、神的な活力と男らしくたしかな眼差しとをもって、あらゆる変貌をとおして、つねに、世界の心臓で燃えさかる最高天を観取した老翁、こういう老翁を賛嘆することには、理念を疑っているすべての人々も、私と同じように、幸福を感じていただきたいのです。私の父である友よ。あなたは私にとって、つねに、イデアリスムスが空想ではなく、真理であるということの、生きた、まのあたりの証拠でありました。」

こののちに義父となるべき人は当時、彼と身分や職業を同じくする多くの同僚たちとはまったく違って、高い教養と進歩的な思想の持ち主であった。義父の家は、マルクス家からわずか数分しか離れていなかった。そして両家の交際はきわめて親密であった。マルクスはルートヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンを第二の父のように尊敬した。

この第二の父は古典に通じ、またシェイクスピアのドラマのかなりな部分を英語とドイツ語で暗記していた。またこの人は、社会問題にも関心が深く、貧しい市民の窮状に心を痛めていた。マルクスがサン・シモンの思想について初めて話を聞いたのは、ヴェストファーレン家においてであった。

裕福な弁護士の息子であり、後に科学的社会主義、共産主義の創始者になるマルクスが、その人生の初期にいだいた思想は、猷辞でマルクス自身が述べているように、理想主義であり、人道主義だったのであり、この二つの主義は、周知のように唯物論者としての、その後のマルクスの思想のなかで生きつづけている。

学位論文でマルクスが扱ったのは、デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異についてであったが、これは後に彼の老大な著作の一部となる筈のものであった。「序言」でマルクスはこのことを次のように書いている。

「この論文は、私がエピクロス派、ストア派、および懐疑派の諸哲学の二因を全ギリシア的思弁との連関で詳細に叙述するつもりでいるもつとも大きな著作のたんに先触れをなすものとみなしていただきたい。」⁽⁵⁾

(5) 大月書店のマルクス・エンゲルス全集補巻第一分冊(第四〇巻)の半ば近くを占めているのは、エピクロス派、ストア派、および懐疑派の哲学にかんする、一八三九年にマルクスによって書かれた七冊のノートと「学位論文」である。この七冊のノートは、もともと膨大な著述のための準備作業であり、これにもとづいてマルクスは学位論文を書いた。この七冊のノートはディオゲネス・ラエルティオス(Diogenes Laertios、三世紀初め以後)、セクストゥス・エンペイリコス(Sextus Empiricus、二世紀)ルクレティウス・カルス(Lucretius Carus、前九六〇年から前五五)、キケロ(Cicero、前一〇六から前四三)、プルタルコス(Plutarchos、四六〇から二一〇)、セネカ(Seneca、前四〇から後六五)その他の著述からの多数のギリシア語とラテン語の抜粋とならんで、マルクスの書いた長短まちまちの論述を含んでいる。

しかし、マルクスは、彼の予定していた老大な著作プランをまったく別種の政治的および哲学的な仕事を遂行するために完成し発表することはできなくなった。しかし、マルクスはその「新世界観」を確立することによって、ギリシア哲学に対する間接的な解答を与えたといえよう。

ここにマルクスの学問に対する一つの強い特徴をみることができる。すなわちマルクスにあっては一つの問題を研究する場合に、その問題を根底から徹底的に、余すところなく研究するという特徴でありこれがマルクスの人生を一

貫した態度であった。

ところで古代ギリシアの哲学体系を、全体的に正しく規定したのはヘーゲルであり、ヘーゲルの哲学史によって初めて哲学史が始まったとマルクスも高く評価している。しかしこの巨大なる思想家ですら、ギリシア哲学史とギリシア精神一般に対して、その高い意義をみい出すことができなかったといわれている。マルクスはヘーゲルのこの弱分野を充実しようとして、「大きな著作」を意図し、そしてその一部を学位論文として発表したのである。

まずマルクスの学位論文の「序言」から、みよう。ここで私たちは彼が学位論文で何を主張しようとしたかを読みとることができる。彼は次のように主張している。

エピクロス派、ストア派および懷疑派⁽⁶⁾の諸哲学の体系のもつ一般的な意義はヘーゲルの哲学史によって正しく規定されている。しかし、哲学史という著述の性格のためもあって個別的な点にたちいって説明されてはならず、またヘーゲルの先入的見解が妨げとなっていて、ギリシヤ哲学史とギリシヤ精神一般にたいするこれらの哲学体系の高い意義を認識することがヘーゲルにはできなかった。しかしこれらの哲学のもつ意義を正しく理解することは、真のギリシヤ哲学史を理解するための鍵であった。

これらの哲学は、神学的悟性の哲学によって論難され否定されてはいるが、神学的悟性の哲学こそ誤りである。ブルタルコスはこの哲学を宗教の法廷にひきだして論難するが、これは一種の侮辱であり、「このことはあたかも、自己の臣下にたいする大反逆罪を問われる王を想い出させる」(ヒューム)ものがある。

哲学は、世界を征服しようというそのまったく自由な心臓のなかに、まだ一滴の血でも脈うっているかぎり、つねにその反対者にたいしエピクロスとともにこう呼びかけるであろう。

「多くの人々の信じている神々を否認する人が不敬虔ではなく、かえって多くの人々のいだいでいる臆見を神々におしつける人が不敬虔なのである。」

哲学は神々を必要としない。プロメテウス（人間のつくり主であり、神々に反抗してまで人類に火をあたえ、人類のために尽した巨人）は「端的にいえば、すべての神々を私は憎む」と告白しているが、この告白は哲学自身の告白にほかならない。人間の自己意識を最高の神性と認めないすべての天上および地上の神々にたいする哲学自身の宣言がこの告白である。

(6) ストア派とは、紀元前三世紀頃の古代ギリシヤに発生し、そのご数世紀続いた流派で、創始者であるキティオンのツェノンが教えた廊下（ギリシヤ語でストアとは回廊の意）からストア派とよばれた。

戦後の一九四七年に、いち早く岩崎書店から日本語で『哲学小辞典』が出版された。この辞典の原書は一九四〇年にソ連で出版された同名の『哲学小辞典』という本である。ソ連哲学の成果を集約したこの辞典は、次のように解説している。

「ストア主義の歴史は三期に分かれる。古代ストア学派（最も傑出せる思想家はクリシッポス（紀元前約二八一—二〇七年）である）、中期ストア学派、新ストア学派である。

ローマ帝国時代のストア学派（新）は、セネカ（約一一一—六五年）、エピクテトス（約五〇—一三八年）、マルクス・アウレリウス（一一一—一八〇年）によって代表され、彼らの主要な関心は倫理学・道徳問題に向けられていた。ストア学派は哲学を倫理学・物理学・倫理に分けた。倫理学においては、彼らは感覚論的認識論を發展せしめた。一切の知識が感性的知覚を通じて獲得される。経験以前の精神は白牌であり、表象とは対象が精神に印刻されたものである。感性的表象次いで智の面から更に仕上げられ、かくて一般的概念判断が組成される。一切の認識過程の担い手は、ストア学派の学説によれば、特殊な物体たるニューマ（空気と火の化合物）たる精神である。

物理学の領域では、ストア学派は唯物論者であり、ヘラクレイトスの火の学説を發展せしめ、自然を物質的なものであると同時に、生ける理性的全体と見做し、その全部分は運動するものである。『ストア学派の賢者は、「生ける發展のない生命」で

はなしに、ヘラクレイトスの・力学的・發展する・生々たる彼の自然観から出てくるが如き、絶対的に運動する生命を考慮している（マルクス）。火は理性（ロゴス）であると共に、神性なのである。世界における万物は厳格な必然性に従属する。古人の運命に関する概念は、ストア学派にあつては、物の因果的聯関たる性質を帯びている。ストア学派の自然哲学から、『賢者』の根本的規範たる『自然に従つて生活する』、即ち、理性（世界的理性と個別的理性）に従うと云うことが出てくる。人間は理性に従ふことによつて、情欲と外的事物の抑圧から解放され、無関心（『アパテイア』）に到達する。自由なる人間は幸福であり、自己の意志に従うだけである。人間の幸福を制約するものは、肉体的快樂ではなくして、徳行を意識することである。一切の対象が唯一の実体（火）から生ずる如く、人間の智は世界理性の一部である。人間は万有の市民である。奴隸と主人、貴族と貴族でないものとは、原則上平等である。ストア学派のかかる平等の要求とコスモポリタンの傾向とは、既に崩壊を開始した奴隸所有者の社会のイデオロギー的表現であつた。（二五七—八ページ）

また懐疑派および懐疑論については次のように述べられている。

「懐疑論とは、確實なる知識、客観的真理の可能性そのものに対し懐疑を表明せる哲学流派であつて、懐疑論者は疑問を原理となす。原ち、各対象に関して、二ヶの相互に排除し合う見解——確信と否定——が許されるべきである、蓋し物に関する我々の知識は信用するに足りないからと彼は云う。哲学的流派としての懐疑論は、古代ギリシヤに發生した。その創始者はピュロン（紀元年三世紀）と云われる。懐疑論者の見解によれば、物の認識が不可能であると確信すれば、理論においては、『判断の抑制』（謂ゆるエポケー）に向い、実践においては、対象に対して差別なき、冷淡な能眼——精神の『安静』——を保証するに違ひない。

ルネッサンスの時期に至り、懐疑論は中世紀のイデオロギーとの闘争・教会權威の毀損において著しい役割を果たした。モンテーネ（一五三三—一五九二年）に次いでピエール・ペイルは『懐疑論の助をかりて形而上学を打破し、それによつて唯物論と健全なる意味を持つ哲学を把握するための地盤を清めた』（マルクス）。だが他方において、フランスの哲学者、数学者、パスカル（一六二二—一六六二年）は懐疑論から神秘論的な結論を引出した、彼は宗教的感情を自己の認識のうちに動揺する理性以上のものであると見做した。

十八世紀における懐疑論の代表者はヒュームであつて、彼は最も重要な哲学的範疇たる実体、因果性の客観的意義を否定するに至つた。『物自体』は認識し得ずとの学説をひっさげたカントも亦懐疑論者の仲間に入れらるべきである。だがヘーゲル

は既に懷疑論が形而学と独断論と闘った功績を承認すると同時に、懷疑論を『思想麻痺』と見做した。懷疑論は、客観的真理の認識可能性を原則的に否定するが、これは経験と実践によって反駁される。弁証法的唯物論は、『認識されないものは存在しない、未だ認識されない物が存在するだけであつて、これも科学と実践の力によって発見され認識されるであらう。』（スターリン）（『哲学小辞典』一三三—四ページ）という立場に立つ。

このような懷疑論にはプラス面とマイナス面があつたが、この懷疑論の眞の弱点を克服したのは、弁証法的唯物論である。以上のような「序文」の叙述によって当時のマルクスの思想の一端を知ることができるが、ここでマルクスは「人間の自己意識を最高の神性」であるとしてゐるのは注目すべき言葉である。この言葉でマルクスが哲学の主体を人間に据えていたことを知ることができるからである。

「序文」をマルクスは次の言葉で結んでゐる。

「しかし、哲学の市民的地位が悪化してゐるように見えるのを喜んでゐるあわれなお歴々にたいして、哲学は、もう一度、プロメテウスが神々の召使ヘルメスに答えた言葉をかえず、

はつきりとわきまえておくがよい、わしはわしの災難を

汝の隷従の分際と取りかえようなどとは思わぬ、

父なるゼウスの忠実な使者として生まれつくくらいなら、

この岩に隷従してゐるほうがまさつてゐると思うのだ。

プロメテウスは哲学の年鑑のなかの最も高貴な聖者であり殉教者である。」（『デモクリトスの自然哲学とエピクロス自然哲学の差異』『マルクス・エンゲルス全集』第四〇巻一九〇—一ページ）

岩崎允胤教授は「プロメテウスの告白へすべての神々を私は憎む」——この告白は哲学自身の告白であり、人間の

自己意識を最高の神性とは認めないすべての天上および地上の神々にたいする、哲学自身の宣言である……」というマルクスが学位論文の冒頭に付した結語の一部を引用し次のように述べている。

「プロメテウスを『哲学の年鑑の中の最も高貴な聖者であり殉教者』と見なす学位論文のマルクスは、人間の自己意識の神性、最高絶対性の立場に立っている。この自己意識の絶対性という主張は、宿命論（デモクリトス）に反対して、自己意識の自由（エピクロス）を擁護しているのである。」

そして教授は「では自己意識とは何か」と自問し、それは人間と他のすべての動物とを区別する人間の特性である、として次のように続ける。

「人間は自己意識をもっていることにより、意識的、自覚的に生活することができ、自己の生活の主人であることができる。したがって、自己の生活を意識し、生活を変更することができる。それゆえ、人間は自由であることができるのであり、この能力が自己意識である。さらに、すべての人間が自己意識をもつものとしてお互いに平等（同等）であり、この平等を意識し、他の人間にたいして自分と平等なものとして振舞うこと（類的意識と類的態度）も、自己意識の原理に含まれている。マルクスの自己意識の原理は、(1)すべての人間が本質的に同等だということ、(2)各人が、自己の主人であり、自立的な主体であるべきこと、(3)人間が相互に平等なものとして承認しあい、振舞うべきこと、を意味している。

このような民主主義的な自己意識の原理は、反キリスト教的でもあった。それは、宗教が主人としての神への人間の隷属を説くものだからであり、人間の自立性を奪うからであり、宗教が人間性をそれ自体として直接に肯定しないからであった。」（橋本剛編著『社会思想史』、青木書店、二二二ページ）

右の「自己意識」解釈に私は賛成である。自然的存在であることから社会的存在へと発展してきた人間が、神とか宗教によってではなく、人間としての自己意識を確立して、人間中心の哲学、人間を基本とする哲学を確立しようとしてきたのが哲学史の大きな流れだからである。

さてマルクスは学位論文でデモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学をとりあげ、両説を対比しているのだが、マルクスがなぜ両者を対比して考察したのかというその理由は、当時「デモクリトスの哲学とエピクロスの哲学」とを同一視し、エピクロスの改変のなかにただ恣意的な思いつぎのみをみるのが、古くからおこなわれてきた偏見があつたからである。この偏見の代表として、マルクスはライブニッツの次の言葉をあげている。

「われわれがこの偉大な人間（デモクリトス）について知っていることについては、エピクロスが彼から借りてきたものぐらいであり、しかもエピクロスには、いつも最もよいものをとってくる能力が欠けていた」

しかしマルクスは、このような通説をくつがえし、エピクロスの優れた点を彼の学位論文で明らかにしたのである。たしかに、エピクロスはデモクリトスを継承している。それ故両者の自然哲学には同一性がみられる。両者の共通的原理は、世界は原子と空虚 *Atome und Leere* から成り立っているということである。そして両者の見解の個々の諸規定では非本質的な差異が多く、面々存在しているようにみえる。しかしマルクスはそうはみないのである。マルクスは次のように言う。

「二人の哲学者はまったく同じ学問をまったく同じ仕方ですべて説いている。だが、——なんと不齊合なことか！——彼らは、この学問の真理性、確実性、適用に坎する、思想と現実との關係一般に坎する、すべての点で、正反對の立場をとっている。あえて言う、彼らは正反對な立場をとっている。」そしてマルクスは両説の本質的差異の解明に

力を注いでいる。

デモクリトスは紀元前約四六〇年から三七〇年にかけて生存した。彼の哲学はプラトンの觀念論的哲学に対し、唯物論的哲学であるといわれ、最も明確な古代唯物論の代表者であるといわれている。レウキッポスの弟子であるデモクリトスは、原子論の創始者の一人であって、彼によれば、二ヶの物質始元——原子と空虚——が存在するだけである。彼は言う。「真実の原理は原子と空虚とであって、その他のものはすべて臆見であり仮象である」。ここで空虚とは原子が運動する空間を指している。

前出『哲学小辞典』（岩崎書店）は、デモクリトスの哲学について次のように述べている。

「原子とは物質の不可分の微粒子であって、不変のものである。原子は永遠に存在し、非常に多様な方向に不断に運動しており、それを区別するものは、形態・大きさ・状態・順序だけであって、音・色・嗅・等々の如き別の性質は原子に固有のものでない。これらの性質は、デモクリトスの表現によれば、『本性上』存在するのではなくして、『条件的に』存在するものである。デモクリトスのかかる見解のうちに既に物質の第一次的物質と第二次的物質に関する機械論的学説の萌芽が見出される。

物体とは原子の結合によって造られ、原子が分解すれば物体も破壊する。靈魂も亦原子から構成されているが、それは火の如き、球状の可動的な原子である。無限に多様な原子が無限の空虚中を永遠に運動しており、それが各方面に転位するため、時には互に衝突して原子の渦巻を作る。原子の渦巻運動から『生滅する』世界の無限の多様性が生ずる。この世界は神によって創造されたものではなくして、自然的道程によって、必然性によって、發生し、消滅する。

デモクリトスは宿命観にまで到達する決定論者であって、彼は偶然性を抹殺し、これを現象の因果的聯関を説明し得ない人々の思い付きと見做している。デモクリトスは自己の認識論を次の如き假定の上にたてている。即ち、感官にまでもたらす物質の繊細な膜（偶像——映像）が物体から出てくるし、分離されるのである。認識のためのすべての材料が感覚によって与えられても、感覚それ自身は通常正しく解釈し得ずして、対象に関する『暗い』知識を与えただけにすぎない。この知識の上に他のより繊細な『明るい』知識、即ち、理性による知識が聳立している。この分析においてこの知識は原子と空虚の顕現にまで到達するのである。

政治的見解においては、デモクリトスは古代民主主義の代表者であり、奴隷所有者の貴族の対立者であった。デモクリトスの唯物論の後継者として、ギリシヤの哲学者エピクロス（紀元前三世紀）とローマの哲学者ルクレチウス（紀元前一世紀）を挙げる事ができる。」（二五二—三ページ）

これに対してエピクロスの哲学はどのようなものであったのか。エピクロスは紀元前三四二年から二七〇年の約七二年間生存した偉大なギリシアの啓蒙哲学者であった。彼はデモクリトスの唯物論哲学を継承し、世界は原子と空虚からなり、そこで無限に多様な世界が原子から組成されており、神々は世界の生活には参加せず、宇宙の空虚に平静に生存しているとみた。原子論の根本原則についてはデモクリトスを継承したが、エピクロスはマルクスの指摘のようにデモクリトスの学説に本質的な変化を持たんだ。エピクロスによれば、原子は直線的に運動する場合に偏差が生ずる。この偏差は恣意的なもの偶然的なものである。エピクロスは偶然性の概念を採入れることによって、デモクリトスの学説から出てくる宿命論を拒否しようと努めた。

エピクロスはデモクリトスの原子論をうけついでが、多くの重要な点でそれを発展させた。岩崎教授は次の点を指

摘している。

「まず第一に、デモクリトスでは、原子は、永遠の未来にわたって、たえず運動すると考えられたが、何が原因で運動するかは説かれていなかったのにたいし、エピクロスは、原子に固有な重さという性質を与え、これを因として原子は落下すると考え、この固有の性によって原子が自己運動するものであることを主張した。

つぎにデモクリトスでは、いっさいの事物の運動は必然的であると考えられたが、これに反して、エピクロスでは、原子は、重さを因とする落下の途中、全く定まらない時と所で――その意味で偶然的に――わずかに方向が偏る、と主張された。これは、原子の運動に、偶然性の契機を導入したものであり、つまり、事物の運動を、いわば必然性と偶然性との統一として扱えたものであることを示すものである。

さらに、エピクロスは、原子の空虚中における運動の速さについて、それは無限ではないが、目に見えるどんな事物の運動の速さをもはるかに越えるもの（超高速だが有限一定）と考えた。この見地は、さきにアリストテレスが、空虚中での事物の運動の速さは無限となるであろう、しかるに無限な速さはいずれもありえぬがゆえに、空虚は存在しないと推定したことをかえりみると、非常な卓見であったと言わねばならない。エピクロスは、とくにアリストテレスのこの説を念頭におきつつ、それに反対して、この自分の説を提示したものと思える。

また、合成体内の原子の運動を詳しく説明し、たとえば、固体内においても、各原子は小さな空虚中を運動しており、その結果、頻繁な衝突がおこって、各原子はそこでは振動のような状態を呈していると考え、また、原子は、固体内の雑多な運動によって、たえず外部にはじき出されるとともに、外部からも新たな原子がたえず入ってきて、その結果、全体として固体それ自身の存立が保たれる、と説明している。等々。」『エピクロス』一九九二〇〇ページ

エピクロスは自己の自然哲学について次のように説明している。

「全宇宙は \wedge 物体と場所と \vee である。けだし、物体の有ることは、感覚それ自身が万人のままで立証していることであり、そして不明なものについては、前述したように、感覚にしたがい思考によって判断せねばならない。また、かりに、空虚とか空間とか不可触的な実在とか呼ばれるものが有らぬとすれば、物体は、その存するところをも運動するところをも、もたないことにならう。しかもわれわれの感覚には、明らかに物体は運動するものとして現われているのに。ところで、物体と場所とのほかに、それ自身全き独立の実在として捉えられ、他の全き実在の偶発性ないし本属性として言われるのではないようなものは、——観念を把握する仕方によっても、すでに把握された観念との比較によっても、——考えることすらできない。さらにまた、物体のうち、或るものは合成体であり、他のものは合成体をつくる要素である。そして、これらの要素は、——あらゆるものが消失して有らぬものに帰すべきではなく、かえって、合成体の分解のさいには、或る強固なものが残存すべきであるからには、——不可分であり不転化である、つまり、それらは、本性上充実しており、どんなものへも分解されてゆきやうがないのである。したがって、根本原理は、不可分な物的な実在(原子)でなければならぬ。」(出隆訳『エピクロス』、岩波文庫、一二—三ページ)

「原子は、たえず永遠に運動する。或るものは \wedge 垂直に落下し、或るものは方向が偏り、或るものは衝突して跳ね返る。衝突して跳ね返るものうち、 \vee (a) 或るものは遠くへ運動して相互にへだたり、(b) 或るものはさらにそのまま跳ね返りの状態を保ちつづける。この後の場合は、(α) 跳ね返り合う原子どもが絡み合っているために、原子が、跳ね返ったのちにただちに、その運動を曲げられるとき、あるいは、(β) 跳ね返り合う原子どもが、そのまわりを、絡み合っているほかの原子どもによって囲まれているときに、起るのである。そこで、(a) まず、跳ね返

った原子が相互にへだたるのはなぜかという、空虚はそもそもおのの原子を分けへだてることを本性とするものであって、原子の運動にたいしては抵抗することができず、ためにこうした結果をひき起すのである。また、(b)跳ね返った原子が跳ね返りの状態を保ちつづけるのはなぜかという、原子の絡み合っている状態が衝突による原子の相互分離を許すだけ、それだけ、原子のもつ堅さが、衝突のために原子を跳ね返らせるからである。そして、これらの運動には、始まりというものがない。なぜなら、原子と空虚とがその原因だからである。

この程度の短い言葉でも、以上の諸点をすべて記憶しておけば、事物の本性を洞察するための十分の輪郭を与える。(同上、一四一五ページ)

「原子は、形状、重さ、大きさ、および形状に必然的にもなう性質、をもっているが、それ以外には、われわれに現われる諸事実に属するいかなる性質をもたない、と考えねばならない。なぜなら、こうした性質はいずれもみな転化するが、原子は決して転化しないからである。というのは、合成体の分解のさいには、或る堅くて、分解されないものが残存すべきであり、この或るものは、有らぬものへの転化をも、有らぬものから(有るものへの)転化をも起さず、ただ、或る原子が位置を変えたり、ときには、或る原子が付加したり分離したりすることによって転化するだけだからである。それゆえ、この位置を変えるものども(原子)そのものは、必然的に、不消滅であり、本性上転化しないものであり、それ自身に固有の嵩かさと形状とをもっている。なぜなら、これだけはどうしても残存せねばならないからである。」(同上、二〇一ページ)

「つぎのことを信ずべきである、すなわち、もろもろの世界も、また、われわれの世界でたえず観察される事物に似た形をしたいずれの限られた大きさの合成体も、すべて無限なもの(原子と空虚)から生成したのであり、それら

は、大きいものも小さいものも、すべて、特殊な原子集塊から分離したのである。そして、それらすべては、ふたたび分解される、すなわち、或るものは速やかに、或るものは遅く分解され、また、或るものはこれこれの原因により、他のものはいかかの原因によって働きを受けて、分解される、と信ずべきである。」(同上、三四―五ページ)

マルクスは原子の直線からの偏りがエピクロスとデモクリトスの異なる点を次のように指摘している。

「エピクロスは空虚中での原子の三重の運動を想定する。一つの運動は直線における落下の運動であり、他の運動は原子が直線からずれることによって生ずる、そして、第三の運動は多くの原子によってひきおこされる。第一の運動と第三の運動は、デモクリトスとエピクロスとに共通である。原子の直線からの偏りがエピクロスをデモクリトスから区別する。」

そしてマルクスは両者を区別するこの偏る運動の理論については、エピクロスは多くの人に笑いにされてきたが、その代表者はまえにもふれたようにキケロであるとしてキケロの次のようなエピクロス批判を引用する。

「原子はその重さによって下方へと直線的にうごく、この運動は物体の自然的運動である、とエピクロスは主張する。だがすぐさま、彼は、もしすべての原子が上方から下方へとうごくならば、けっして原子が相互に衝突することができないだろう、ということに気づいた。この男は、そこで虚構に逃げこんだ。原子はごくわずかずつれる、と彼は言った。だが、こんなことはまったくおこりえない。こうして、彼によれば、原子相互の複合、連結、付着が生じ、これらのことから、世界、世界のすべての部分、世界のうちにあるすべてのものが生じることになる。これがまったく子供じみた虚構であるということは別として、彼はとうてい、彼の欲するところには到達しない。」(キケロ、『最高善と最大悪について』)

キケロは偏りのどんな原因もないとエピクロスを批難している。この偏りについてマルクスは次のように解釈している。

「原子は純粹に自立的な物体である。あるいはむしろ、天体のように、絶對的な自立性において考えられた物体である。原子は、それゆえにまた、天体のように、直線においてではなく斜線をえがいて運動する。落下の運動は非自立性の運動である」。ルクレティウスは、正当にも、「偏りは運命の掟を破る」と主張した。

ここに物質の自主的品格の指摘をみることができる。すなわち、物質はその自己自身の品格によって、落下の運命に抵抗し、偏りも生むのである。物質の最も基本的な運動は、自己を保存するため、自己保存に役立つ他の物質と結合しあるいは分離しようとする要求である。もしこの要求がなければ物質は、直線的に落下する以外にないだろう。しかし、原子は純粹に自立的な物体であるがため、直線の運命に抵抗し、偏りを生じ、斜線を描いて運動するのである。デモクリトスの直線論は決定論であり、宿命論であり、必然論であるが、エピクロスの哲学はこれを拒否して、直線の運動のほかに偏差する運動を認め、必然論に対し、物質の自主性と、そこから生ずる偶然性の概念をとり入れた。ここに物質の主体性を認識するエピクロス原子論の優越性がみられる。

マルクスはエピクロスによる偶然性の概念の採用について以下のように述べている。

「デモクリトスは必然性を、エピクロスは偶然を適用している、しかも、どちらも、対立する他方の見解を論難的な怒りをこめてしりぞけている。

この区別の主要な帰結は、個々の自然現象の説明の仕方に現われている。すなわち、必然性は、有限的自然においては相対的必然性として、決定論として現われる。相対的必然性はただ表

在的可能性からみちびかれうる。いいかえれば、諸条件、諸原因、諸根拠等々の環を介して、その必然性は媒介される。実在的可能性は相対的必然性の解示である。そして、われわれは、これがデモクリトスによって適用されているのを見る。」

マルクスの学位論文の要点を深野安太郎氏は次のように要約している。

「マルクスによれば、デモクリトスは物質的自然のみを考えているのに対して、エピクロスは物質的自然と精神的自然との総合を考えている。つまり、自然を単に静的に・観想的に考えるだけでなく、自然に対して作用を加える要素をも併せ考えている点において、エピクロスはデモクリトスにまさっていることを、マルクスは主張しているのである。これは明らかに青年ヘーゲル学派の考え方であり、『エピクロスの自然哲学はデモクリトスの不手際な祖述にすぎない』とした当時の通説に対する反対論を、青年ヘーゲル学派的立場から主張したものと解すべきであろう。マルクスがかような見解をとるに至った事情を、メーリングは次のように説明している。『マルクスにとっては生きることは常に働くことであり、働くことは常に闘うことであった。(Telean-Arbeiten-Kampfen) かように考えるマルクスをデモクリトスから遠ざけたものは、エネルギーシユな原理が欠けていることであった。』と。」(前出『初期のマルクス』六八ページ)

ここで淡野氏は「エピクロスは物質的自然と精神的自然との総合を考えている」と述べており、この言葉を理解するのはむずかしいが、氏の言う精神的自然とは自然のもつ運動性をさすものであろう。この点をマルクスはエピクロスの見解の長所とみており、マルクスはデモクリトスの原子論をエピクロスが創造的に発展させたことを高く評価した。そして、デモクリトスによる原子の必然性に基づく宿命論的解釈に対し、物質の偶然性と運動性を大胆に主張

し、そして必然性と、その必然性の背後にある神々に対する恐怖から、人間を解放しようとしたエビクロスのなかに、「もっとも偉大なギリシア啓蒙主義者」をみい出し、高く評価したのである。そして更に進んで、マルクスは当時の彼の青年ヘーゲル派的な見解のもとに、哲学を実践のための批判的武器として、自由と啓蒙のための闘争の武器として仕上げようとする意図があったのである。マルクスは当時はまだ観念論者であり、理論と実践の矛盾を観念論的に処理しようと試みてはいるが、しかし彼の見解のなかにはすでに唯物論者としてのマルクスの顔が鋭く現われていたといえよう。

ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所編集の『カール・マルクス・フリードリヒ・エンゲルス全集』、補巻、第一分冊（大月書店刊第四〇巻）の「序文」は、マルクスの初期著作集のすぐれた解説を与えているが、そこでの学位論文についての解説のなかで次のような指摘がみられる。

この学位論文の内容については、一九二三年メーリングによって『マルクス・エンゲルス遺稿集』第一巻に収められて公刊されて以来、「全くヘーゲル流の観念論的ものであり、従って後にマルクス自身によって完全に克服せられたもの以外の何物でもない」と評価されがちであった。その理由は、献詞の中でマルクスがイデアリスムスを「それのみが真実の言葉を知っている・確信の深い・赫灼たる・かの観念論 (Gener überzeugungstiefe, sonnenhelle Idealismus, der allein das wahre Wort hehrt)」と述べ、さらに序言の中でヘーゲルを「巨人の如き思想家」(der riesenhafte Denker)と呼んでいたためであった。しかしながら、これに対して、モスクワのマルクス・エンゲルス研究所の委託を受けて『マルクス・エンゲルス全集』を編纂したリャザノフは、その第一巻の解説の中で、「マルクス自身はおそらく全くヘーゲルの線で動いているつもりでいたのであろうけれども、しかし少くとも詳しく論じている中に多

くの点において、ヘーゲル哲学を特に青年ヘーゲル学派的に——すなわち感覚的な・生きた世界に対する強烈な情熱をもって、強度に実在論的な意味に——把握していた」ことを指摘し、この論文で展開された見解を評価している。

さて学位論文でマルクスがギリシヤ哲学の中で、特にデモクリトスとエピクロスの自然哲学を問題にしたのは、彼らの原子論に、神を否定し真の哲学を確立するための唯物論的基礎をみると同時に、デモクリトスの必然論、宿命論に対するエピクロスの偶然論、自由論の優位をみたからでもあったが、では原子論を生み出したギリシヤ哲学の輪郭はどのようなものであろうか。

出隆・古在由重編『哲学用語辞典』（青木文庫、一九五二年）は、ギリシヤ哲学について次のように解説している。ギリシヤ哲学は人類史上最初にあらわれた哲学である。ここには、哲学上のほとんどすべての問題が芽ばえていた。それは徹頭徹尾、ギリシヤの奴隸制によって特徴づけられている。それをつぎの三期に分けて考察することができる。

1 奴隸制形成期（前六世紀）——ミレトス派において万物のもとが物質に求められ、唯物論の基礎が成立した。これは一方、万物の転変を主張するヘラクレイトスによって弁証法的唯物論の形をとって完成され、他方、万物は不変であると主張するエレア派によって形而上学的唯物論の形で形成された。さらに、ピタゴラス派は、別途の系統をひき、世界の本質を数とみなし、観念論の源流となる。

2 奴隸制最盛期（前五―四世紀）——唯物論は原子論に具体化され（デモクリトス）、認識論（プロタゴラス）が発生し、社会観（ソフィスト）が成長した。それに観念論が確実な基礎をすえた（プラトン）。アリストテレスはギリシヤ哲学の総合者。

3 奴隸制崩壊期（前四世紀―後六世紀）——社会および人生にかんする哲学的見解が前面にでる。快樂主義のエピクロス派と禁欲主義のストア派との対立、懷疑派の末期的見解があいつぎ、新プラトン派の神秘的・反動的哲学によってこの時期に終止符がうたれる。この時代の哲学は、中世紀の哲学の準備をなした。ギリシャ哲学の一般特性は、外界を直接にとらえ、それを形相的にまとめようとする点にみられ、認識論への追求は発達しなかった。それゆえ、ギリシャ哲学は奴隸制がそうであったように、そのなかに起死回生の道をみつけることができなかつた。

同じくギリシャ哲学をキリスト教哲学に並ぶものとして解説した川田熊太郎教授は次のように述べている。

「ヨーロッパ哲学を多年考究していて明白となったことは、それに二つの大系統があることである。これを認識すればヨーロッパ哲学の理解は容易になる。その一つはギリシャ哲学およびその系統のものであり、他のものはキリスト教哲学である。われわれは、このヨーロッパ哲学を理解するために、その基礎的学科である存在学 (ontology, *ontologia*) を導きの糸としよう。ここでは (1) 存在、(2) 生成の根本法則という二つの問題によって考察を進めたい。これらは存在学の基礎的問題のうちの二つである。

存在学という学名は、中世末ないし近世初めに成立したのであるが、存在の探究は、古代ギリシャ人が始め、中世のキリスト者たちが継承して、近世、現在に至っている。

ギリシャ哲学およびその系統の哲学は、「存在するところのすべてのもの」(panta ta onta)「すべての物」(ta onta) を「存在」(to on) または「プュシス」(physis) と言ひ表わす。後者は、*phyo* (生む) と *phyessthai* (生まれる) との動詞の語幹から作られた名詞であるから、生む作用とその結果たる生まれたものを意味しうる。このプュシスを継承したのが、ラテン語のナートウーラ *natura* である。そして近世以後のヨーロッパ各国語は、このナートウーラー

をそれぞれ僅かに変化させて受入れているのである。そしてわが国は明治時代以来、これを、道家の哲学では重大な意味をもつ「自然」という言葉をもって翻訳してきているのである。

さて、古代ギリシヤ人は「存在するところのすべてのもの」すなわち「存在」(on)を自然と呼んで、この自然を探究した。自然に存在するものどもは生滅するが、それらの根底には不生不滅なるものがあると考えられる。これが真に存在するもの、真実在、ousia (usia) である。古代ギリシヤ人の存在の探究は、この不生不滅なる自然である。「真実在」の探究を究極としたのである。ゆえにこの直実在をも「ト・オン」は意味する。そしてこれは文法的には中性である。このト・オンすなわち自然は、それ自身が始元(原理 arche)であり、原因(aitia, causa)であって「生むもの」「結果を生ずるもの」であるが、虚無から創造するものではない。古代ギリシヤ人の哲学は、タレス (Thales, B.C.c. 624-546) の『*フュロソフのものの始元は水である*』にはじまる。(川田熊太郎『*原典が語る哲学説の歴史*』、公論社、一九七五年四月、十一―二ページ)

ここで「四つの元素」説について簡単にふれておこう。

タレスはギリシヤ七賢人の一人で、政治活動などをしたのち、自然研究に従事したが、著作は残さなかった。ミレトス派の一人であり、最初の哲学者といわれている。

西洋哲学は紀元前六世紀頃、古代ギリシヤのイオニア植民地である地中海沿岸南部の都市ミレトスから始まるとされている。

タレスが有名なのは、万物の根源が「水」であるとのべたからであり、「万物の始源 (arche) は水であり、コスモスは生きていて、神靈にみちている」とのべている。アリストテレスによれば、タレスは大地が水の上に浮んでいる

と考えたのである。大地といえども水なしでは不毛の砂漠にすぎない。またタレスは「魂 (Psyche) の本性は永遠の運動・変化であり、自発的である」と述べ、「精神 (nous) はコスモスの神であり、万物は生きていて (プシユケーをもち) 同時に神霊にみちている」とものべており、世界はカオス (Chaos 混沌) ではなく、コスモス (Kosmos) であり、宇宙であり、人間も小さな宇宙としてそのなかに含まれている全一的世界であると考えた。そしてこの世界の原理、法則、仕組みであるロゴス (Logos) を探究しようとした。

このようなタレスをはじめアナクシメネス (Anaximenes, B.C. 585/84—528/24)、アナクシマン드로ス (Anaximandros, B.C. c. 610—c. 547) たちのミレトス派とその後の展開はイオニア自然学とよばれるが、それは現に存在する事物や現象があるがままに受け入れ、時間・空間の統一の中に諸事物の本性をみ、神というような超越者をみとめない立場の学説であった。

アナクシメネスは万物の根源を「空気」としてとらえた。水が万物の栄養といえるなら、空気は生命そのものである、とみたのである。

万物の根源を「土」とみなしたのはクセノパネス (Xenophanes, c. 570—c. 470 B.C.) である。「一切は土から生じ、一切は土に終る」と彼は述べている。「水」を「土」に代えたのは、種子にあたる「土」と養分にあたる「水」を組み合わせた二元論的考えである。

万物の始源を「火」とみたのはヘラクレイトス (Heraclitus, c. 535—c. 475 B.C.) である。彼は万物は火からなり立ち、火へ解体すると考えた。一定の周期で永遠に生成焼滅がくりかえされる。火はロゴスである。

このように万物の始源の探究は「水」説にはじまり次第に発展してきた。川田教授は続けて次のように述べてい

る。

すなわち万物の始源は「空気、無限、火、あるいは地・水・火・空気とこれら四つをあるいは混合せしめあるいは同類を一所にまとめ分類する愛情と憎悪、さらに無数の種子(spermaté)とこれらを運動させる思惟または理性(nous)がそれであるというように、つぎつぎに異説が主張されたが、遂にデモクリトス(Demokritos, B. C. 460/59—371/70)の原子論、すなわち自然の始元は無数の原子(to atomon, ta atoma, 不可分なるもの)と、それらの運動の場所たる空虚(to kenon)とであるという思想によって、ひとまず完成する。この、彼らが出出した真実在たる自然は、質料(hylé, materia)すなわち物質的存在である。したがって彼らは、自然(世界)はこの質料のみからなると考えて、すべての存在の究極の始元すなわち原因としての質料を探究したのである。このゆえに、彼らの自然哲学は、質料主義(hylicism, materialism)の哲学である。」(川田熊太郎『原典が語る哲学説の歴史』、前出、一一—二ページ、ゴチは井上)岩崎允胤教授は次のように述べている。

「周知のように、ギリシャ哲学は、その当初から、自然界の事物の雑多と運動を説明することを重要な課題としてきた。しかし事物の雑多と運動とを一つの根本物質によって捉えようとするイオニアの見地は、やがてパルメニデスの有名な『有るもののみ有り、有らぬものは有らぬ』という論理によって批判され、真に『有るもの』は単一で不変不動、不生不滅で充実している(空虚を含まない)とされた。そこからして事物が雑多であり運動変化しているように思うのは感覚の臆見にすぎないと主張された。パルメニデスの論理を認めたくえで、しかもなお事物の雑多と運動とを説明しようと試みたのが、アナクサゴラスであり、原子論者たちである。パルメニデスの単一な『有るもの』がいわば無数に打ち砕かれて、しかもその一つ一つのいわば、碎片(「有るもの」ども、原子)は、それら自らでは不変化、

不可分であり充実しておりながら、それら無数の碎片を相互に分けへだてる空虚（「有らぬもの」）のなかを運動しており、そうした碎片どもの結合と分離とによって、いっさいの事物——目に見える事物から、靈魂、理性、意志、神々などに至るすべて——は存在し、あるいは変化する、と説明するのである。したがって、原子論による事物の説明の仕方、いちじるしく機械論的であった。しかし、すでにここに、事物の雑多と運動を説明するためには、たんなる『有るもの』（充実している原子）のほかに、これと対立する『有らぬもの』（空虚）が不可欠な契機であるという弁証法的見地が看取される。『エピクロス』、出隆・岩崎允胤訳、岩波文庫、一九八一—九二ページ）

ところで以上でギリシア哲学は人類最初の哲学であり、原子論もギリシア哲学を出発点とするという位置づけを与えられているようであるが、マルクスは『エピクロスの哲学、第一ノート』で、デモクリトスとインドの裸行者との出会いについての叙述を残しており、またこの点に関して最近興味深い紹介が日本でも行われているので、以下インドの唯物論、原子論について紹介しよう。

カルカッタ大学教授ムリナルカントイ・ガンゴーパーディヤヤ Mrinalkanti Gangopadhyaya 著『インドの原子論——歴史と資料集』Indian Atomism——History and Sources, K.P. Bagchi & Company の一九八〇年度初版発行本の序論の抄訳が、佐藤任氏たよによって、『科学と思想』誌、一九八三年四月、第四八巻に発表されている。そこで佐藤氏は「この『序論』は、今日、インド原子論を研究するための最新の論文といえる」とし、また著書『インドの原子論』の編集者であるD・チャットーパディーヤ氏の次の言葉を注目すべき主張であるとして引用している。

「自然現象の研究で、原子論は疑いもなく古代インドで展開された最も重要な科学観の一つであったし、私の知るかぎり、原子論を論述した包括的な研究、とりわけ原典資料を論述したものはこれまでなかったといえる。……こ

の本の出版によって、世界的な科学史家も、古代の科学思想の全般的蓄積で少なくともインドの貢献の一側面を正しく理解する待望の機会をもてることになった。古代原子論はもはやデモクリトスやエピクロスの原子論だけを意味するものではない。しかもそれがこれまで、ヨーロッパ中心主義を意識的に克服しようとしてきた科学史家の著作でも、一般的に古代原子論だとみなされてきたのである。

さらに注目しておきたいこととして佐藤氏は以下のように述べている。

「マルクスが『エピクロスの哲学、第一ノート』で一六四九年のP・ガッサンディの『ディオゲネス・ラエルティオス第一〇巻の研究』をノートし、また論文『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異』で『ディオゲネス・ラエルティオス』IX・35の『彼(デモクリトス)はインドで裸行者たちとも会い』という部分を引用して述べていることである。この記述は、東西科学史とりわけ原子論の歴史研究できわめて重要だと思われる。インドの裸行者というのは、ジャイナ教の二つの重要な宗派の一つのディンガラバラ派のことで、デモクリトスはこの原子論を学んだかもしれないという重要な証言となるからである。」

右での「マルクスの記述」を『マル・エン全集』、四〇巻、大月版から引用すれば次の如くである。

「デメトリオスが『同名人録』で、またアンテイスネスが『哲学者の系譜』で語っているところによると、デモクリトスは幾何学を学ぶために、エジプトに旅して僧侶のもとにゆき、ヘルシアに旅してカルディア人を訪ね、さらに紅海にまで達した、とのことである。若干の人々の主張するところによると、彼はインドで裸行者たちと会い、エチオピアにも赴いた、とのことである。彼に休息を許さないのは一面では知識欲であるが、しかし同時に、彼を遠地に駆りたてるのは、彼が真の・すなわち哲学的な・知識に満足しなかったためでもある。」(一〇〇ページ)

では古代インド哲学における原子論とはおよそどのようなものであったのか。

原子論者は基本的には唯物論の立場に位置する。インド唯物論がブラーフマナ主義（インド的農村社会確立当時の司祭者である婆羅門の編集したブラーフマナすなわち祭儀書に依拠する思想）の正統派や仏教およびジャイナ教から異端視された点を鳥井敦氏は次のようにのべている。

「インド唯物論は通常『ローカーヤタ』と称せられ、『人民の中に広まっているもの』『物質を基礎とするもの』を意味する。ところがこのローカーヤタには独立の書物が見当らず、ブラーフマナ主義の正統派や仏教、ジャイナ教の文献の中に、最も低劣で嘲笑すべき対象として、断片的にしか登場してこない。」（鳥井敦「古代唯物論研究の手本」、書評：D・チャットパーディヤーヤ著／佐藤任訳『ローカーヤタ・古代インド唯物論』、『唯物論研究』、第二号、汐文社、一九八〇年九月、二二九ページ）

そして一口で「ローカーヤタ」といっても、そこには自ずから様々な潮流があったであろうが、それらの文献から浮き彫りにされるローカーヤタの主要なメルクマールは、(1)「精神は身体（物質）の所産であり、身体（物質）の減（つまり死）とともに精神は滅する」とする身体論、(2)現世肯定の快樂主義（肉食、性的享樂など）、(3)「直接知（感覚）のみが確實で、推理、類比、聖典の言葉などは確実な知識の根拠とはならない」とする懷疑論、の三点であるとし、

「このため、聖典の言葉を最終の拠り所とし、離欲を介し、身体（物質）から純粋な精神を永遠に分離すること（解脱）を目指す正統派から、ローカーヤタは恐るべき断滅論（虚無論）、道徳否定論とみなされ、極力荒唐無稽なものに歪曲して描写されることとなった。」（同上）と述べている。

しかしインドド原子論の提唱者は一方で唯物論を嘲笑しているジャイナ教徒であるといわれている。

インド民族の主流をなしているアーリア人は前一三〇〇年頃、北西インドにはいり、やがてガンジス川平原に移住し、インド的な農村社会を確立したとみられている。その当時の農耕社会の精神的指導者が司祭婆羅門であり、彼らが編集した聖典のなかで最古のものが『リグ・ヴェーダ』であり、哲学説が展開されている『ウパニシャッド』は最もおそく成立した。インドの哲学的文献では、原子を示す言葉として「アヌ」と「パラマース」が用いられているが、「アヌ」という言葉は最初はこの『ウパニシャッド』で「非常に小さい、極微」という意味で名詞と形容詞に用いられていた。しかし原子すなわち不可分の物質という特定の用語として使用されはじめたのは、ヴェーダンタ学派が五世紀前半に編集した根本経典『ブラフマ・スートラ』以降であるといわれている。この学派は『ウパニシャッド』を絶対的聖典とし、その思想にもとづいて哲学体系を組織した学派であった。

中世にいたって婆羅門教は六つの哲学学派に分れ、それぞれの根本経典や教科書をつくったが、その一派であるニヤーヤ学派と密接な関係をもつヴァイシエーシカ学派（この開祖はカナダ、150-50 BC）は合理主義的経験論的立場に立ち、言葉は人間の約束習慣によってつくり出されたものであり、知識は経験的であり、ヴェーダ聖典は相対的意義をもつものにすぎないと主張した。そして認識の成立する根拠としては直接知覚と推論の二つだけであると主張した。また万有の構成については六つの原理を認めた。すなわち実体（地・水・火・風・虚空・時間・方角・我・意）、性質、運動、普遍、特殊、内属である。もろもろの我（靈魂）に付着している善悪の業が不可見の力となって活動を始めると、もろもろの原子が結合して複合体となり、現実の地・水・火・風を形成し、これによって宇宙万有が生まれるとこの学派は説明する。そしてもろもろの概念は上位概念に対しては特殊であるが、下位概念に対しては普遍であり、性質と運動と普遍と特殊との四つは実体に属していて、本来密接不離の関係にあり、これを内属という。ヨ

ーガすなわち意を制御し統一することに助けられ、この六つの原理を如実に知るならば靈魂（我）が他のものに束縛されず独存することになり、その本性を發揮して最高福祉である解脱に到達することができる。この派は説く。

この派の文献では「アヌ」という言葉は二つの意味で用いられている。すなわち「アヌ」は特殊な大きさを表わす意味と、もう一つは物質そのものを表わす意味とに使い分けられた。

インドの原子論の提唱者はジャイナ教徒であるといわれるが、ジャイナ教はマハーヴィーラによって創始された。ジャイナ教は相対的な観察法によるならば、判断をのべ、哲学説を組織することも可能であると主張する。ジャイナ教徒は、宇宙、物質、虚空、運動の条件、静止の条件という五つの実在体から構成されているが、微細な物質が靈魂をとりまいていて、その本性をくらましているから輪回がおこると考えて、極端な苦行によって物質の力をそそぎ、靈魂の清浄な本性を回復して解脱を得ようと求めた。彼らは世界の創造神あるいは世界主宰神というものを承認しないで自力による解脱を説いている。信者には富裕な人が多く、前世紀までのインド民族資本の過半数はジャイナ教信者の手中にあったといわれている。ジャイナ教のあとにあらわれるのが仏教である。

ジャイナの原子論を絵的に理解するために、ヤコービが示した簡単な説明からはじめるのがよいだろう、として、ムリナルカントイ・ガンゴパーディヤー教授は次のようにヤコービを引用している。

「ジャイナ教は、この世界のあらめるものは、靈魂と単なる空間を除いて、物質（ブドガラ）から生成され、そしてあらゆる物質は原子（バラマース）から構成されていると主張する。各原子は空間の一点（ブラデーシャ）を占有している。しかし物質は粗大状態（ストウーラ、パーダラ）であるか、微細状態（スークシュマ）であるかのどちらかである。物質が微細状態のときは、無数の原子が一粗大原子の空間を占めている。原子は物質という点では不滅である。

各原子には、一種類の味・香・色と、二種類の触がある。しかしこれらの質は、個々の原子にたいして不変的で固定したものではなく、変化し發展する。原子は群に配列され、形成された形態は多様である。原子はそれ自身で運動し、その運動は非常に早く、宇宙の一端から他端まで一瞬のうちに通過する。

いろいろな種類の原子が、地・水・火・風の四元素と一致していないことは、述べられていることから明白である。だがはっきり述べられてはいないが、原子は、元素の特徴的な性質を顕現することによって区別され、したがって四元素を形づくっているものと考えられる。

ジャイナによれば、カルマ(功罪)は物質的性質(パウドゥガリカ)をもっている。靈魂は外界との交通からきわめて微細な物質分子により浸透される。物質分子はカルマとなり、特定の身体(カールマナ・シャリーラ)を形成する。そしてそれは最終的に解放されるまで、靈魂から離れない。こうして、カルマ物質を合成している原子は、功罪の結果をもたらす特殊能力をもっているものと考えられている。」(Jacobi, *Indian Atomism, Studies in the History of Indian Philosophy*, vol. II, pp. 133—34.)〔佐藤任訳、「インドの原子論」季刊『科学と思想』No. 48. 一九八三年四月、一七九—一八〇ページ〕

「ジャイナの原子論は、初期の著作である『五原理の精要』や『バガヴァティー・スートラ』で詳しく述べられている。それらには物質のおもな形態、原子の構成と特徴、定義、分類、集合原子との関係、原子の振動と運動などを述べている。異なった視点から、原子は四つのグループに分類されている。(1)ドゥラヴィヤ・パラマーヌ(物質としての原子)、(2)クシェートラ・パラマーヌ(場所としての原子)、(3)カーラ・パラマーヌ(時間としての原子)、(4)パーヴァ・パラマーヌ(状態としての原子、たとえば色等)。原子の特徴は次のように記されている。

『物質という視点からすれば、ある原子は他の原子と同等である。原子は不可入、不可分、不燃、無受取（アガツジャ）、無半分（アナルダ）、無内部（アマデイヤ）、アブラデーシャ（複数の場所を指さない、一点だけを占める）である。一原子は単独物質すなわち物質の一分子である。原子は風で触れるほど形状では非常に微細であるが、風には触れない。原子と諸原子の集合は量では無限であり、物質という面からすれば不変的であり、色・味・香・触の様式の面からすれば可变的である。原子は物質という視点からすれば無終局であり、空間・時間・状態の視点からすれば終局と無終局である。』(J.C. Sikdar, *Studies in the Bhagawatsutra*, p. 568.) (同上、『科学と思想』No. 48. 一八〇ページ)

ジャイナ派の原子論のほかに、仏教の原子論、ニヤーニヤ・ヴァイシェーシカ派の原子論およびインドにおける原子論の起源とその最初の提唱者についても教授は紹介している。⁽⁷⁾

(7) ムリナルカナンティ・ガンゴーパーディヤヤ教授はまた「仏教の原子論」について次のように述べている。

「仏教の経量部と毘婆沙師の二派は原子論に賛同し、不変の物質が実在することを認めている。しかし前者は不変の物質は推理することができるだけだとし、後者は完全に直接に知覚することができることを主張する。経量部の見解を全面的に説明することは困難で、特定の項目を世親の『俱舍論』やマードヴァの『全哲学綱要』や、グナラトナの『六派哲学集成』への註釈など、他の仏教や非仏教の著作から集めなければならない。

毘婆沙師の系統の権威ある文献の一つは『俱舍論』と、それへの著者自身の『釈論』である。しかし原子論に関するかぎり、両派には重大な相違はないであろう。シャンカラは両派をともに説一切有部（サルヴァースティヴァーディン）という名称でひっくるめて、簡潔に両者の原子論を描写している。

『これらの仏教徒は、地・水・火・風の四元素とその特性、および感覚器官を含むそれらの生成物を認める。四元素は原子である。地原子は堅性であり、水原子は湿性であり、火原子は熱性であり、風原子は動性である。結合して、これらの原子は地物質、等を形成する。』(H. Jacobi, *Indian Atomism, Studies in the History of Indian Philosophy*, vol. II, p.

この描写に、『俱舍論』とその『釈論』から補足することができる實在(ダルマ)には原因となるものと、ならないものがあり、原因となるもの(サンスクリタ)には、受・想・行・識・色の五つの集合(スカンタ)がある。色の集合(ルーパ・スカンダ)には、毘婆沙師によれば、変化した物質の特殊形態、五つの感覚器官(視覚・味覚・聴覚・嗅覚・触覚)と感覚器官の五つの対象(色・味・音・香・触)と四つの物質元素(地・水・火・風)がある。感覚器官は、構造では物質的であるだけでなく原子的でもある。その特殊構造は次のように述べられている。

『視覚器官を構成している原子は、アジャージ(香菱)の花の形をして眼瞳に配列されている。原子は透明の膜でおおわれているので四散しない。これらの原子は互いに押しつぶさず固塊状になっていると言う人もあるが、原子は互いをおおっていない。なぜなら原子は水晶のように透明であるから、聴覚器官を構成している原子は、ブールジャ(樺)の葉の形をして耳穴の内部に配列されている。嗅覚器官を構成している原子は、細長い鉄棒(シャラーカ)の形をして鼻孔の内部に配列されている。味覚器官を構成している原子は、半月の形をして配列している。触覚器官を構成している原子は、身体そのものの形状に配列されている。』

五感の対象も、原子の集合状態にあると述べられている。色(ルーパ)等はみなそれぞれ特殊な原子の集合であって、合成されたものであり、物質に相当するものである。四つの物質元素(地・水・火・風)も原子で、自生性と派生性の二種類の特性がある。四元素の自生性の特性は、それぞれ堅性、湿性、熱性、動性である。この特性から特定の機能が發揮される。堅性のために地は保持する。たとえば甕が水を保持するように、湿性のために水は凝集する働きがある。熱性のために火は化学変化をもたらす。動性のために風は転置と成長をもたらす。色・味・香・触・音は物質元素の派生性の特性だとされている。ヴァスバンドゥ(世親)は仏教原子論の重要な結論として、原子はいつでも集合して現われ、単独では現われないという。一個の原子は物質の最小単位であるが、単独では絶対に現われない。経量部は七原子の集合を最小の合成物(アヌ)と見なし、いたらしい。原子は互いに接触しているのではなく、原子のあいだには一定の間隔があると考えられている。ダスグプタは、山上曹源が漢訳にもとづいて述べた説一切有部の学説を紹介している。

『原子は見ることも、捕えることも、動かすこともできない。分割し、分解し、見、聞き、味わい、触れることのできないものである。それにも拘わらず、それは不変的なものではなく、瞬時の閃光のように現われる。七つのこのようなパラマースが一緒に結合して一つのアヌを形成し、この結合形態でのみ原子は知覚できるものとなる。この結合は中心にある一つ

の原子と、そのまわりにある他の原子からなる群固形態で生じる。』(Dasgupta, A History of Indian Philosophy, vol. 1, pp. 121 f.) (同上、一八〇—一八一ページ)

またニヤーヤ・ヴァイシェーシカ派の原子論については次のように述べている。

「ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ派によれば、四元素（地・水・火・風）に対応する四種類の原子がある。しかしこれらは、ジャイナ派が考えているように同質ではなく、質的に異なっており、全部で二四の質を認め、それらの質は一つの物質以外にも内在する普遍的な質（サーマーニヤ・グナ）と、一つの物質にだけ内在する特殊な質（ヴィーシェーシヤ・グナ）の二部類に分けられる。結合、分離、数、大きさなどの質は第一部類にはいり、色、味、香などの質は二部類にはいる。特殊な質についてだけ、原子は多様である。すべての原子は等しく球形（バリマンダラ）の大きさをもっているが、特殊な質のうちで、地原子は、色・味・香・触（温暖）の質をもち、水原子は色・味・触（冷）をもち、火原子は色・味・触（熱）をもち、風原子は触（温暖）の質だけをもっている。地原子にある四つの質、色・味・香・触を除いて、原子の質はすべて不変である。というのは、これら四つの質は熱によって変化するからである。

新しい創造がはじまるにあたって、原子はアドリシュタすなわち功罪の力によって運動しはじめる。この運動が一原子と他の原子とを結合させて、もの数えきれないほどの多様性を形成する。ニヤーヤ・ヴァイシェーシカによれば、原子からの物質の生成は独特の秩序にしたがって起こる。最初に、ただ二つの原子が結合して二価原子（ドゥヴィヤスカ）をつくる。次に三つの二価原子が結合して三価原子（トゥリヤスカ）、最小の目に見える物質をつくる。三つの原子も二つの二価原子も全く物質を生みだすことができない。注目すべきことは、各原子のどんな結合も新しい物質を生みださないことである。したがって原子の結合は、生成力をもつ結合（アーラムバカ）か、生成力をもたない結合（アナールムバカ）かのどちらかとなる。生成力のある結合は同種類の原子のあいだでだけ起こり、異種類の原子のあいだでは起こらない。だから、たとえば二つの地原子また二つの水原子が結合して他の二価原子また水の二価原子を形成するが、地原子が他の水原子と結合しても新しい物質はつぐられないことになる。」(同上、一八三ページ)

さらにガンゴバーディヤヤ教授は原子論のインドにおける起源と最初の提唱者について一般に原子論は実在論者が賛成し、観念論者が反対していたので、あらゆる存在を物質という用語で説明する唯物論者は、原子論の最初の提唱者となるのに適していたとして、「W・ルーベンはおそらく最初のインドの哲学者であるウッターラカ・アールニが唯物論者すなわち原

始唯物論者であった、あるいは少なくとも唯物論的原理を説いた人だと考えている。」(同上、一八七ページ)とのべている。また原子論を述べた最初の人物がだれだったかを調べるかわりに、インド哲学で原子論を定式化させることになったと考えられる特殊事情を確定しようとした人があるとして、

「彼らの考えでは、ギリシヤで原子論が出現したのと同じ事情がインドの哲学者の場合に起こったとされる。ギリシヤの原子論がパルメニデスとヘラクレイトスの二つの相対立する見解の統合であったように、インドの原子論もブラフマン(ウパニシヤッド)の思想と仏教の思想の統合であったと考えられている。その考え方は次のように説明できるであろう。」

ギリシヤ哲学において、デモクリトスは当時の諸問題、とりわけ彼の先輩であるパルメニデスとヘラクレイトスが創造した問題を合理的に解決するために原子論の仮説を展開した。インドのウパニシヤッドの觀念論のように、パルメニデスは唯一の不変の存在を唯一の実在だとした。インドの初期仏教のようにヘラクレイトスも変化・生成を唯一の実在だとした。パルメニデスの一者と同様に、原子は創造されず、実体において堅固で一様であり、それ自体で変化しない。しかし空間において絶えず間なく運動しながら、そのいろいろな結合と分離によって、原子はこの変化する世界のあらゆるページェント(壮麗な見世物)を組み立てている。これがパルメニデスを満足させる永遠の静止の要素とヘラクタイトスを満足させる永遠の変化の要素を規定している。インドのニヤーヤ・ヴァイシシェーシカ派がまた直面していた状況と大きく似ていることは、理解しにくいことではない。一方にはウパニシヤッドの永遠不変のブラフマンの学説があり、他方には仏教の永遠流転の学説がある。だから、その解決策として原子論の仮説が現われた。永遠不変なものである原子は神として、原子の結合と分離は生成として規定される。」(同上、一八九ページ)と述べ、

「この考えを信頼できるものとすれば、原子論は絶対的不変性と絶対的刹那滅性の統合をもたらしたということになる。」(同上、一八九ページ)としている。さらに教授はインド哲学の諸学派で、原子論が広く認められた理由としてのヤコービの次の叙述を引用している。

『原子論は、永遠であるが全く不確定な実体としての物質についての素朴な概念のかわりに、物体は絶え間なく変化するがしかも物質の不変性を維持しているというわかりやすい説明を導入した。』(前掲書一四三ページ)(同上、一九〇ページ) また教授は原子論に賛成した学派のなかで、ニヤーヤ・ヴァイシシェーシカ派だけがこの理論に大きく心を奪われており、そのために、後世、原子論はこの統合学派のほとんど独占的な信条として知られるようになったことを指摘し、

「ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ派は、インド哲学のすべての学派のうちで、どんな宗教的かわりももっていないかった。彼らの堅実な方法論、論破しがたい論理学、健全な常識は、どんな偏見や障害ものともせず科学的思想方向を追求するのに最も適していた。だから彼らは、古代よりずっと一五〇〇年もの長期にわたって、各時代を通じて観念論者から容赦なく続けられた攻撃にたいして、原子論のためにたたかい、また原子論を發展させようとした。」（同上、一九一ページ）と述べている。

以上のように古代ギリシャ人は自然とは何かについて思索を加え、自然の起源は水であり、火であり、空気であり、地であるとの諸説を立てたが、ついに自然の起源は原子と空虚であるというデモクリトスの説に到達した。これは素朴ではあるが現代でも通用する自然の始源観である。ギリシャの自然哲学は水や空気や火などの一つの元素によって自然が構成されているという一元論から始まり、数とその比例関係によって世界を説明しようとしたピタゴラス学派を経て、水と空気と火と土との四つの元素の比例関係によって自然界を説明した多元論からさらに、これ以上は分割できない原子と、原子が運動する場所である空虚という説に到達した。

(8) 現代の理論物理学者は「レウキポス、デモクリトスの原子論は、現代のわれわれの知識から見ても、驚ろくほど当たっている点が多い。しかし、当然のことであるが、当時には原子の存在を実証する事実は知られていなかったから、それは思弁上の一つの臆説にすぎなかった。」（湯川、片山、福留著『素粒子』第二版、岩波新書、三ページ）と述べ、また「古代における原子論の最後の代弁者は、紀元前一世紀古代ローマのルクレティウスである。その後キリスト教の勃興とともにアリストテレスの哲学以外のギリシャ哲学は異端として禁止され、神学の支配する長い中世の間、古代ギリシャの唯物論の最高峰である原子論は完全に忘れ去られた」（同上、四ページ）と述べ、「原子の実在が実証されるのは、はるかに下って十八世紀末から十九世紀に至る時代においてである」と指摘している。

物理学者のウェルナー・ハイゼンベルクはヘラクレイトスにおいては世界の根本的なあり方は運動・変化そのものであり、それが「火」という言葉で象徴的に語られていることに注目しているとして、藤沢令夫教授は次のようはべている。

「もしこのヘラクレイトスの『火』を『エネルギー』という言葉で置きかえるならば、ヘラクレイトスの思想を現代物理学

の立場からほとんどそのまま再現することができるだろうと言っております。つまり、エネルギーというものは、すべての素粒子、原子、したがってすべての物体が形づくられるいちばんのものであり、動くものであり、物質や熱や光にトランスフォームされるものであり、かくて世界におけるすべての運動変化の原因と呼ばれうるものである。こうした点がすべて、ヘラクレイトスが『火』という言葉に託して表明した思想にきわめて近いというわけであります。」(藤沢令夫『ギリシャ哲学と現代』、岩波新書、一三一ページ)

福留秀雄氏も次のようにのべている。

「われわれの自然を見わたすとき、そこには無限といつていい多種多様の変化に富んだ物質と、それらの織りなす複雑な諸現象が見られる。しかし、自然はたんに複雑であるばかりでなく、その多様な物質と現象を貫ぬいて、美しい秩序と規則性が認められる。こうした自然の多様性と規則性の背後には、それを統一する基本的な原理があるにちがいない、という考えは、古くから人間の心の中に芽生えていた。自然の基本原理に対する人間の追求は、一方で神話や宗教を生み出したが、他方、神話や宗教の助けをかりずに、物質的原因のなかに自然の基本原物を求めようとする唯物論的な考えも、古くから形成されていた。

自然の多様性と規則性を統一的に説明するために考えだされた原理のもつとも古いものとしては、古代中国やインドで行なわれた『すべての物質は地水火風空より成る』とする五大説や、古代ギリシャで紀元前六世紀のミレトスのターレスによって唱えられた『水はあらゆる物の物質的原因である』という説などを挙げることができよう。これらの説は、今日のわれわれの目にはずいぶん素朴なものに見えるが、しかしそこには、自然の基本原理を物質的なものに求め、それを理性的に追求しようとする態度の雛形を認めることができる。これらの思想で表明された重要な点は、多種多様な物質が少数の基本的な実体から構成されていると考えることによつて、自然の統一と多様性を説明しようとしたことにある。」(『素粒子』、一〜二ページ)

これまでみてきたように古代インドやギリシャにおける「仮説的原子論」は、今日では「科学的原子論」へと発展しつつあるが、現代の原子論も、しかしまだ確立された理論ではない。

福留氏はこの点について次のように述べている。

マルクス主義の創始と発展 (二・完)

「今日では、この複雑多様な自然界を根本から理解するためには、何よりも先ず『素粒子とは何か』を明らかにするのが正道であり、また近道でもあることがはっきりしている。

ここまで来るのに人類は何代も何代もかかって努力を重ねてきた。狭い意味での科学者の傾向の強い人々も、自然哲学的傾向の強い人々も、それぞれの仕方、そしてそれらがたがい補いあって、素粒子を素材とする今日の自然観、今日の物質観をつくりあげるのに貢献してきた。といっても、それはまだ最終的なものではない。それどころか、私たちは『素粒子とは何か』という問に対する満足な答を持っていないのである。最近二十年間に素粒子の種類が急速に増大した。それにともなつて、それらを統一的に記述する方法が、いくつか提案されてきた。しかし、それらはいずれも、まだ確立された理論とはいえない状態にあり、どれが真理により一層近いかについての客観的な判定は困難である。恐らく何等かの意味で、素粒子概念の根本的な改変がなされねばならないだろうが、それは同時に、個々の素粒子の背後にあって、それらを存在せしめ生滅せしめるころのものが、果して何であるかを探りあてることを意味しているであろう。」（湯川秀樹、片山泰久、福留秀雄著『素粒子』第二版、岩波新書、はしがき）

さてエピクロス派、ストア派および懷疑派の哲学に取り組んでいた当時のマルクスは「左翼ヘーゲル主義者たち」の仲間に加わっていたのであるが、その代表者はアーノルド・ルーゲ、ブルーノー・パウエルおよび唯物論に到達する以前のルードウィヒ・フォイエルバッハ、などであり、その影響下に多才な急進的青年学徒が集まっていた。一九世紀の三〇―四〇年代のドイツは政治・経済的に立遅れていたため、神、キリストの本性、福音書の起源などの諸問題で、青年ヘーゲル主義者と右翼ヘーゲル学派との論争が行われ、またプロシアの国家をめぐる論争が行われ、青年ヘーゲル派はこの制度を批判したが、しかし自由主義的幻想を乗り越えることができず、立憲制度的改革の実現とフ

リードリツヒ・ウィルヘルム四世の支配から分離されたドイツの統一を求めた。この主張の代表者がブルーノ・パウエルであつた。彼はキリストの歴史的事実性を拒否し、福音書伝説の起源をシュトラウスと同様に選ばれた個人の創造的活動に求めた。

マルクスとエンゲルスは、最初は青年ヘーゲル派の立場に立つたが、「自己意識」に関する青年ヘーゲル派の学説をうけいれ、宗教の幻想から解放され、青年ヘーゲル派の観念論とその自由主義的幻想に徹底的に批判を加えるようになった。

マルクスは宗教を批判し、プロイセン国家を批判し、最後に後でみるように市民社会を批判するに至るのであるが、すでにこの方向性は、まだ二三歳のマルクスの学位論文にその萌芽をみいだすことができるのである。この学位論文の注のなかでマルクスは、「哲学の実、実践はそれ自体、理論的である」と述べている。この言葉のなかに実践を志向しながら、観念論者の域に止まっているマルクスの矛盾をみい出すことができる。この矛盾は「それは個的な現存を本質と、特殊な現実を理念とくらべるところの批判である」(補巻、第一分冊「第四〇巻」、三二七および三二九「原ページ参照」という言葉にも示されている)。

マルクスが真の実践の道を歩み出し、労働者階級と共産主義の地盤に身をおくのはまだ数年後である。マルクスが哲学とプロレタリアートの革命的实践を統一するという課題に取り組みはじめたのは、彼の論文『ヘーゲル法哲学、序論』が示すように、一八四三年の終わりごろからであつた。